

蛇と日本文化

Snake and Japanese Culture

劉 克華

Ke-hua Liu

Abstract: Since the appearance of humanity, there has been the contact between humanity and snake. The snake has the certain influence on the various countries cultures. In Japan, this kind of contact can be found as early as in the Jomon period. Ever since that period, Japanese have treated the snake as a kind of god in their beliefs. The influences of snake on Japanese culture are discussed in this paper using a lot of examples grouped by four aspects: the myth, the thought, the daily life and the proverb.

一、はじめに

昔から蛇と人間の付き合いがあった。世界各国は蛇に対して無視することはできなかつたものである。たとえば、中国では蛇は常に美女というイメージで伝説や物語に現われている。蛇を祖先神として奉る所もある。キリスト教の国々では蛇は諸悪の源、原罪を作つたものとして、邪悪の権化と見なされ、天使の足に踏み続けられている。地中海文化の中では基本的に蛇は賢いものと考えられたものである。ギリシア神話の中では蛇は大地や水の世界に結びついて考えられてきた。また、蛇は何度も脱皮を繰り返すところから、再生や不死のシンボルにもなつたのである。日本では蛇との繋がりには縄文時代に遡ることが出来る。その時は周知のように自然条件が悪く、古代人は自然と闘いながら、生きぬかぬばならなかつた。科学技術も低下していたので、自分の力で説明できない自然現象をすべて神の意思だとされた。敵になる凶悪な動物たちもそうであつた。これらの動物をすべて神だと彼らは信仰していた。蛇もその動物たちの代表の一つである。日本民族の蛇信仰は大雑把に言うと二つの段階に分けられる。最初は絶対の信仰対象であり、蛇に強い畏敬心を持つものであつた。社会の発展に伴って、畏敬心から少し嫌悪に変わった。このような矛盾している蛇信仰のために、蛇は日本文化に甚大な影響をもたらした。文学作品、思想や日常生活にその姿がうかがわれる。今でも、その影響はまだ残っている。本稿では、神話、思想、日常生活、そして諺への影響を考察したい。

二、神話への影響

古代日本人が蛇信仰をもつていたために、蛇は日本神話にたくさん現れた。日本神話に出る蛇は殆どある種の神とされるが多かつた。また、治水に関わるものも少なくなかつた。著名なものには周知のような須佐之男命による八俣大蛇の退治、三輪山の神話と海神の娘豊玉姫神話などがある。ここではあまり有名ではない別の例を挙げてみたい。

『常陸国風土記』の那賀郡茨城の里の項に次のような話がある。

兄の名はヌカ彦、妹の名はヌカ姫と言う兄妹がいた。妹が部屋に居たとき、名前は知らないが、求婚する男が居た。男は、常に夜しか来なかつた。夫婦となつて、一夜で懐妊した。生み月になって、妹は小さな蛇を生んだ。妹は驚き、心中に神の子であろうと考えて、清浄な杯に蛇を盛って、祭壇を設けて安置した。一夜の間に、蛇は杯の中に満ちた。さらに大きなかめに換えると、蛇は成長してかめ一杯の大きさになつた。そこで、子供の蛇に「お前は神の子である。私には育てることが出来ない。父の居るところへ行きなさい」と言つた。子は悲しんで泣き、顔を拭いて、「母の命令は承知しました。拒否するわけではないのですが、一人で行くのはちょっと辛いので、誰かともに行くものを添えてください」と言つた。ヌカ姫は「我が家にいるのは母と伯父二人のみであるから無理だ」と言つた。この蛇は恨んで、ものも言わず、別れのときに、怒つて伯父を殺して天に登ろうとした。驚いた母がかめを子蛇に投げつけたので、子は天に登ることが出来なかつた。それで、この峯に留まつた

のである。その子孫は社を立てて祭礼をし、現在に至るまで続いている。(佐藤健一郎『十二支の民俗誌』より)

生まれてきた蛇を見て神であろうとすぐ考えられることは、蛇を神と信仰している日常が背景にあったからこそだと思われる。

『日本霊異記』の上巻に、元興寺の道場法師のおい立ちの物語がある。

尾張国の阿育知郡の農夫が、雨が降り出したので木の下に隠れていると、目の前に雷が落ちてきた。子供の姿である。鉄の杖で突こうとすると、雷は助けてくれれば、お礼に子供を授けると言う。やがて生まれてきた子供は頭に蛇を巻きつけていた。その子大変な力持ちだった。その後は、農夫の子は元興寺の童子になり、鬼退治や寺の水田経営などの功績を認められて、道場法師と呼ばれるようになった。

蛇を恐れる人の心は蛇に秘められた神性を畏怖してのものであった。これはこの神話にはっきり示されている。また、稲作農耕社会に豊かさをもたらす蛇を信仰していることの、これも一つの現れでもある。

三、思想への影響

蛇信仰は神話の素材にだけでなく、思想の面にも影響を与えた。それは蛇を着る考えである。理由はその信仰自身にある。蛇は神であり、神への忠実さを示す方法は蛇を身体につけることだと古代人には考えられた。蛇の衣装を身にまとうことによって、もっとも容易に自分の願いや願望は達せられると信じられた。蛇の衣装とはまずその皮である。その皮の模様、色彩が真似られるわけである。次は鱗である。これについて、吉野裕子氏はその著書『蛇』(法政大学出版局)の中において、次のように述べておられる。

蛇の皮の模様はその色彩とともに複雑に亘るが、古来、人間によって蛇の代表的な模様として意識されたのは、三角形、菱系紋であった。さらに蛇の鱗も蛇衣装するものとされ、その鱗は六角形、三角形、波形紋で表現されたのである。

古代人は蛇や蛇の一部分に似ている物を全部蛇に見立てた。例えば、樹木や山(三輪山)など。樹木では主として蒲葵(ホキ)

である。

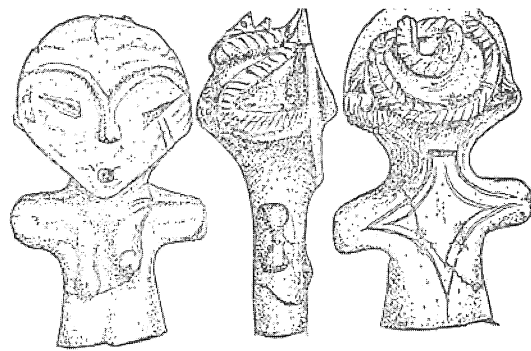
蒲葵その幹が神の男根、つまり神蛇に見立てられたために、その葉にも同じ呪力があると信じられた。(吉野裕子『蛇』より)

蒲葵は蛇の見立てであるから、当然、その葉は蛇の一部分である。当時の人々は蒲葵の葉で作った蓑笠、履物などを身体につけるのが蛇を身体につけるにあたると思われた。柳田國男の『阿遅麻佐の島』のなかに次の一説がある。

「沖縄では世の始まりのことを蒲葵葉世という。衣服のなかったそのころは男女とも蒲葵で作った蓑の如きものを纏っていた。近世まで用いられていた七襷袴は襷の多い麻の衣装であるが、これは蒲葵の遺制として、認められている。今も生児に命名の際、老女がこの袴を頭に載せる……」

沖縄では蒲葵の袴が広く纏われるということが柳田國男の文章で分かった。なぜ人々が蒲葵の袴を纏うかと言うと、当時の蛇信仰の影響だと私は思われる。

原始人は身体に纏う以外に、直接蛇の形の物を頭や首に乗せる場合もある。次の絵は代表的な一例で、マムシを頭に載せる縄文土偶である。それも蛇信仰の影響である。



(宮坂光昭『蛇体と石棒の信仰』より)

四、日常生活への影響

蛇の信仰で、昔の人々は日常生活に蛇を強く結びつけた。その表われとしては人々が蛇で禍福や吉凶を占うことと日々に関わる諺や俗信である。つまり、蛇は禍福に強く関わっている存在だった。

前述のように、昔、科学技術が低下していて、例えば、道端で蛇に出会うと、古代人は必ずその出会いを何らかの予兆と受け取り、何らかの吉凶禍福を読み取ろうとしたのである。今でもその習慣がまだたくさん残されている。以下は『民俗大辞典』より日本各地で言い伝えているものである。

「福島県の田舎では蛇を見ると、その日はあまりよくない、夏の初めに蛇を見るとその子は足が遅くなり、トカゲを見ると足が早くなる」

「蛇が道を横切ると悪いことが起こる（宮崎県）」

「蛇に道切りをされると、何か持ち物を落とすから、蛇に道を横切られた時は歩退け（奈良県吉野郡）」

これらは全部縁起が悪い例である。もちろん、縁起のいい例もたくさんある。例えば、以下のものである。

「蛇を三四見ると夜はご馳走がある（兵庫県赤穂地方）」

「蛇がトグロを巻いているのを見ると良いことがある（兵庫県赤穂地方）」

「蛇の交尾を見れば吉（千葉県南総）」

「蛇の番うのを見れば、子を孕む（青森）」

「蛇が番っているとき前垂れをかぶせたら、福を得る（奈良）」

道端だけではなくて、蛇は夢に見られる場合もある。この場合は何らかの知らせであると考えられるところが多い。例えば、以下のものである。

「帯を枕元に置いて寝ると蛇の夢を見る（各地）」

「蛇の夢を見れば験が悪い（三重県四日市）」

「蛇の夢を見れば、よくないことが起こるから、氏神様にお参りしなければならぬ（長野県）」

「蛇が懐に入った夢を見るとお金が入る（兵庫県赤穂地方）」

蛇を見たり、蛇の夢を見たりする以外に蛇に関連した事柄に出会うと、すぐ吉兆禍福を連想させることも多くの所にもある。

「蛇が家の下に生き埋めになると不吉なことがある」

「蛇の穴へ女性が小便をすると取りつかれる」

「沖で蛇の話をすると漁がない」

「味噌桶の下に蛇が這うと味噌がだめになる」

「倉の蛇を殺すと貧乏になる」

「蛇の抜け殻を財布に入れると金が溜まる」

探せば、蛇に関わる言い伝えはきりがないほどまだまだたくさんある。これは蛇が日本人の日常生活へ大きな影響をもたらしてきたことの証であるといっても過言ではない。

五、諺への影響

諺は古くから人々に言い習わされた言葉である。日常生活に深く関わっていた蛇は数多くの諺に用いられている。ここではいくつかの例を挙げて、日本文化への影響が視られると思う。

「蛇に足なし、魚に耳なし」（当たり前のことを言う時の比喩）

「蛇も一生、蛞蝓も一生」

これは人間が身体や境遇に違いがあっても、人間としてみんな同じように生きていると言う意味である。

「蛇を描きて足を添う」「蛇足を加える」

この二つは同じで、無用なことをしないほうが良いと言う意味である。

「蛇の足より人の足見よ」

これは無益な詮索するよりも自らを反省するほうがより大事だということである。

「蛇竹上がり、百足地に転ぶ」

足のない蛇は竹に登ったが、たくさんの足がある百足は転んでしまった。何かをするとき気を配らないと、失敗しちゃうという意味である。

「蛇の曲がり根性」

生れ付きのものを直すことが難しいと言う意味である。

六、おわりに

本稿では四つの面から蛇の日本文化への影響を述べたが、実際の影響はこれよりもっと大きいと思われる。ここにあげた資料の説明では、まだ不十分であると考えている。それを今後の課題にして中国の蛇信仰と比較しながら、研究していこうと思っている。

本稿作成中に、森先生からいろいろ有意義なことを教えていただくばかりでなく、原稿についても、言葉遣いまで直していた

だいた。ここに先生のご指導、ご配慮に対し、心から謝意を表したい。

参考文献

五十嵐謙吉：十二支の動物たち, 八坂書房

谷川健一：神・人間・動物, 平凡社

佐藤健一郎、田村善次郎：十二支の民俗誌 八坂書房

吉野裕子：ものと人間の文化史・蛇, 法政大学出版局

金子浩昌：日本史の中の動物辞典, 東京堂出版

高木敏雄：日本伝説集, 宝文館

柳田國男監修：民俗学辞典, 東京堂出版

谷川健一：日本の神々, 白水社

(受理 平成 17 年 3 月 17 日)